

はじめに

本報告書は、平成 21~24 年度に科学研究費補助金(基盤 A)を受けて実施された研究プロジェクト「発展途上国教育研究の再構築: 地域研究と開発研究の複合的アプローチ」の成果をまとめたものである。この研究では、発展途上国を調査対象とする 30~40 代の中堅研究者が中心となり、用いる調査手法やアプローチは異なるものの、調査対象地の共通性を通じて、視点や手法を融合し、それによって従来の研究の枠にとらわれない新しい展望を見出すことを目指していた。このプロジェクトの研究組織は、比較教育学者としての訓練を国内あるいは海外の大学で受けた者、国際開発協力の実践に近いところで研究を行う者や地域研究的アプローチを取って、政策や行政への直接的影響を与えることを望まない者など、異なるタイプの研究者で構成されていた。相容れないとも見える研究観を持つ者が共働しようとした背景には、比較教育学という一つの分野で活動しながら、研究分野や手法、対象などによって形成されてきたアイデンティティ・グループが棲み分けているような状態を乗り越えようという前向きな意欲があったと思う。

4 年間の研究活動は、主に二つの分野にわたった。一つは、「発展途上国」と特化せず、我々が関わっている比較教育学という学問分野全体がどのように認識、実践されてきたかを把握するため、既刊論文のレビュー、学会員アンケートなどを通じた学問観の整理・把握と議論であった。もう一つは、特定の途上国に焦点を当て、実際に異なる研究手法を持つ研究者同士でチームを組んで海外調査を行うことであった。

第一の活動分野である学問観の整理と議論に関しては、平成 21 年 11 月に学会員 699 名にアンケートを配布し、研究姿勢やよく使う手法、依拠する理論、調査対象などについて調査し、その分析結果を学会などで発表することを通じて、学問論についての議論に貢献することを試みた。この活動をきっかけとし、科研プロジェクト以外からも多くの執筆者を得て、平成 25 年 2 月に『比較教育学の地平を拓く—多様な学問観と知の共働』(東信堂)という書籍が刊行された。本書刊行に至る経緯の詳細は、「はしがき」、「序章」、「おわりに」などで述べているので、ここでは割愛する。平成 25 年の科研期間終了目前に本書が刊行されたことは、実験的な性格ゆえに、分かりやすい成果につながりにくかったこの科研プロジェクトから、何がしかの結果につながったということで、大きな肩の荷を下ろす思いであった。それと同時に、この本ではやり遂げられなかったことがあった。従来、漠然と認識されていた比較教育学の認識の多様性を、研究実践を伴った実体としてとらえ、それなりに検証したというのは、本書では未熟ながらも達成感を感じる部分だった。しかし、結局、様々な研究視角、対象、アプローチがある、ということを示したにとどまり、それらが学問領域としての比較教育学にとって、なにか積極的かつ生産的な展望につながるのか、相互に影響し合うことで、どのように化学変化を起こし、学問が活性化されるのか、といった議論にはつながっていなかった。少し時間が経てばまたやれるかもしれない、といった思いで、最終年度の研究費の一部を繰り越し、報告書作成期限を 1 年引き延ばした。

今回、報告書作成にあたり、大上段に構えた学問談義はできないが、ざっくばらんに意見交換する座談会ならできるのではないかと思ひ立ち、5 名の研究者が集まった。そこで話したことは、本原稿を書き、しばらく咀嚼したあとだからこそ言える、自分の学問上の経験や立ち位置、そして、今後の展望だった。系統だった議論ではないが、これからも続けていきたい研究のアイデアも数多く出て、知的刺激のある場になった。この座談会の議事録が本報告書の第一部に収録されている。

本科研プロジェクトで、抽象的な学問観を議論することと、学問観の異なる研究者が実際に現地で調査する活動は車輪の両輪のようなものであった。活動の第二の柱として行ってきたのが、モルディブ共和国での調査である。モルディブへは、4年間にわたり、毎年、調査チームを派遣したほか、一部の研究者による個別の調査出張も行われた。また、科研最終年の平成25年2月には、モルディブ国教育省と共催でセミナーを開催し、研究成果を発表した。こうした一連のモルディブでの活動は、科研の主要メンバーの一人であった森下稔氏(東京海洋大学)が主導した。本報告書第二部に掲載されている4編の論文と1編のエッセイは、この活動の成果である。詳細な解説は、第二部のはじめに、森下氏が書いているので、そちらに譲りたい。モルディブという小国の教育について、それぞれ異なる研究視角から、(森下氏が好む表現を使えば)“寄ってたかって”研究した結果、お互いの研究に対して、また、モルディブ国の社会や教育について何が見えてきたのか、本報告書のあちこちに散らばっているアイデアや感覚が、やがて議論を経てもっと形を持ってくるまで、まずは現段階の成果として、ここに提示したいと思う。

研究プロジェクトとしての期間は既に終わっているが、比較教育学の認識と実践に関する探究は始まったばかりだと改めて感じている。

平成26年3月

研究代表者・山田肖子

目次

はじめに.....

第I部

「途上国教育研究の再構築：地域研究と開発研究の複合的アプローチ」座談会

(討論者：杉村美紀、服部美奈、森下稔、山田肖子、山内乾史) 1

<方法論としての「比較」、どのように比較教育学を学んだか>	2
<理論化と地域理解の関係>	5
<比較教育学の核が生成される過程>	10
<研究の志向性の多様化についての課題と可能性>	14
<比較教育学の今後の展望>	18
<今後の研究アイデア>	20

第II部

フィールドワーク調査報告論文～モルディブ編～.....23

モルディブ調査の目的・意義・経緯—地域研究と開発研究の再構築を求めて—

(森下稔) ...24

はじめに.....	24
1. モルディブ調査の目的と実施に至った経緯.....	24
2. モルディブ調査の意義.....	25
3. モルディブ調査の経過・実績.....	27

島国における教育選択—モルディブ共和国における生徒のケンブリッジ国際教育課程修了認定試験の成績決定要因

(山田肖子、Krishna Pangeni) 32

はじめに.....	32
1. モルディブの概要.....	33
2. 小国の教育と試験の関連性.....	35
3. 学習到達度を決定する要因についての研究.....	36
4. 研究の概要.....	37
5. 調査結果.....	39
6. 考察.....	45

小規模国家モルディブにおけるイスラーム教育の展開—グローバル・スタンダードと地域性の葛藤—

(服部美奈)..49

はじめに.....	49
1. モルディブにおけるイスラームの展開—1970年代末から1980年代.....	50
2. モルディブにおけるイスラーム教育と国民教育の交差.....	52
3. 私立イスラーム学校の周辺化—アッドゥ環礁アッドゥ・ハイスクール (Addu High School).....	58
4. 首都マーレへの集中化.....	69
5. モルディブにおけるイスラーム教育の特徴.....	72
おわりに—残された課題.....	73

民主主義の定着過程における市民性教育の課題—モルディブの児童生徒の現状から—
(森下稔) ...75

はじめに—民主化と市民性	75
1. モルディブの社会と教育	76
2. モルディブの児童生徒の現状	78
おわりに	82

【付録】モルディブ フィールド顛末記 (鴨川明子).91

図表目次

表 2-1 調査対象生徒の通う学校の所在地及び生徒の性別	38
表 2-2 調査対象教師のデータ	39
表 2-3 教科の成績の相関関係	40
表 2-4 変数の定義、割合、平均、及び標準偏差 ($N=517$)	41
表 2-5 数学の成績に影響する要因の標準化回帰係数	42
表 2-6 英語の成績に影響する要因の標準化回帰係数	43
表 2-7 ディヴェヒ語の成績に影響する要因の標準化回帰係数	43
表 3-1 マドラサ・イスラミヤ(アッドゥ・ハイスクール)の生徒数の推移(1994-2011)	61
表 3-2 アッドゥ環礁における学校数および生徒数(1992)	66
表 4-1 Q4 の回答結果	79
表 4-2 Q11 の回答結果	81